

# 芳一と琵琶



西園寺隆憲

今から数百年前、現在の下関に芳一という一人の盲人が住んでいた。芳一は男にしておくにはもったいないほどの美しい顔立ちであった。言い寄る女性も数多であったが、言い寄る男性もまた、数多であった。言い寄られたところで芳一にはどうする術もない。養う甲斐性もなければ、男色に走る性癖もない。それどころか、芳一は己が生きるということにすら無情を感じていた。

目が見えぬわたしは、なぜ生きているのか

前世の因果……そんなものはわたしは知らない。

強者が弱者を支配し、弱者は野垂れ死に、強者は栄華を極め贅沢三昧

弱者として生まれたわたしは、卑屈に生きるだけなのか

芳一は己の境遇に不満を抱くのではなく、人間の生そのものに疑問を抱いていた。生きる意味……そして、弱者と強者、果てしない人間同士による、私利私欲の為の殺し合い。目の見えぬ芳一には、光や浮世は視えないが、不思議と人の声音や発する音で人が視えた。同じ挨拶でさえ様々に、動物達の鳴く声でさえ様々な感情がこもっているように聴こえ心根が視えた。他人と会話することは芳一にとってただの苦痛であり、卑屈に物乞いをして生きるぐらいなら死んだほうがまし、まして、己で稼いで食べ物を買ひ、こんなつまらぬ世の中で、無駄に生きながらえるつもりもなかった。だからといって、自ら命を絶つこともせず、唯、ただ、琵琶を弾いていた――

昼といわず、夜といわず、芳一はただ琵琶を弾き、源平の物語を語った。

誰に語るということなく、己の為に、己の境遇と平家の滅亡を重ねるように語った。

食うものがなければ食わず、食うものがあれば食う。生きていればその日を生きていなければ死ねばいい、ただ生あるうちは琵琶を弾き語るだけ。何かを望むわけでもなく、何かにすがらるつもりもない。孤高というのでもなく、ただ……孤独。夢も希望もなく生きていた。

「芳一や、よかったら寺に住まぬか？」

ときおり寺に芳一を呼んで琵琶を語らせていた和尚が言った。阿弥陀寺という寺の和尚である。阿弥陀寺は壇ノ浦で滅亡した平家の怨霊を供養するために建立された寺であった。寺の近く、浜に近いところには墓所も設けられていて、入水した天皇のみ名や暦臣たちの名前を刻んだ墓碑が立てられ、毎年忌日になると菩提を弔うために法会が営まれていた。死霊が怨み、此の世に災いをもたらす、そうした原因を無理やり作り上げ、そして、慰めて人々は無理に納得している、芳一はそう考えていた。人々が往生したがる極楽というものがあって、そこには華が年中咲き乱れ、優しい光に照らされ、戦いや諍いも無い、全ての生き物が幸せに暮らすそんな極楽があるのなら、たとえ怨みを残して死んだところで、わざわざこんな世の中に還ってくるわけがない。わたしなら絶対に還ってこない……そう芳一は思っていた。

「はい。わたしは別に何の希望もございません。和尚様にそう言っていただけるのであればそのようにさせていただきます。」

芳一は己の気持ちをそのまま語った。卑屈なのではなく、捨てている。和尚は、その態度に何か言うのでもなく

「では今から仕度をしてきなさい。」

それだけを言って、その場を離れた。和尚の優しさが芳一には視えた。説教するのでもなく、優しい言葉をかけるわけでもないが、和尚の心は芳一に伝わっていた。しかし、芳一も涙を流すわけでもなく、淡々と誰もいない座敷で、和尚が居たらしき方向に頭を下げた。春の鳥が遠くのほうで鳴いていた。

芳一の琵琶の腕は名人と噂されるほどのものであった。感情がこもっているとか、いないとか、そういうことではなく、恐怖をおぼえるほどの表現力のなせる業。栄華を極めた平家が滅亡の道を辿る物語を芳一は琵琶で語る。女子供にいたるまで容赦なく、いや、自ら進んで入水自殺をした平家の一族。無念であろう……悔しかったであろう……そして、

苦しかったであろう……

しかし、一度は栄華を極めている……

同じく苦しいわたしとは、雲泥の差である……

化けて出るなら出ればよい……

そして

そして……

わたしをこの苦しい此の世から連れて行ってほしい……

芳一はいつしか、そう考えながら琵琶を弾き語るようになった。それからの琵琶は前にも増して見事なものであった。美しい顔、美しい口元、そこから漏れる美しい声。聞く者は皆どこか異界に連れて行かれそうな気持ちになった。その物語に入り込み、その合戦のさなかに放り出されるのである。恐怖と悲しみ、そして憎しみ。殺しあう音。荒々しい波の音、軋む船、女達の叫び声、男達の怒声、子供達の泣き声、血に染まる海、肉に突き立つ刃、漂う首、髪の毛、狂った目……

此の世はなんと残酷か……

神や仏は……おらぬのか……

ある蒸し暑い夏の夜のことだった。蛙の鳴き声が煩く、座っているだけで湿気が纏わりつくような、風一つ無い厭な夜。ちょうど寺の檀家に不幸があり、和尚は通夜に呼ばれて行った。小坊主もいっしょに出かけたので寺には芳一一人であった。眠るに眠れぬ芳一は涼もうと思い、縁先に出ていた。縁先は阿弥陀寺の小庭に面している。夜の匂いが芳一を包み込む。芳一は琵琶を弾く。夜の闇、いつもの闇に向かって芳一は一人で琵琶を弾く。蛙の声も芳一の耳には届かなくなる。琵琶と芳一が一体と化して闇に溶け込む。

闇は優しく芳一を包み込む。

何も考えずに、琵琶を弾く。

月の気配。纏わりつく夜気。

実体の無い闇に漂う魂。

突然芳一は弾くのをやめた。

空気が変わった……

足音？がする……

近づいて来る……

無言で……

その足音は裏門のほうから裏庭を抜けて、縁先のほうへどンドン近づいてくる。足音は芳一のすぐ目の前にきて、止まった。そして、

「芳一！」

力のこもった大声が響いた。聞きなれない、威圧的な声の調子である。

「芳一！」

「はい！」

二度目でやっと声が出た。相手の声に威圧されおろおろしながら芳一は言った。

「わ、わたしは目が見えぬものです。呼んでいただくのは、どなた様でしょうか……」

「あ！いやいや失礼した。いつもの調子で大声を出してしまった、かたじけない」

深々と頭を下げているのが感覚として伝わった。

「あ！そのような。わたしのようなただの琵琶弾きごときに……頭を上げてください」

「それでな芳一殿。お願いしたき事があって参ったのじゃがな、聞いていただけるか？」

いきなり……

「いきなりそう言われましても、わたしにできることなどはさて……」

「いやいや、そう難しいことではない。わしはこの寺の近くに宿を取っている者なのだがな、わしの主君が、やんごとなきお方での、御家来衆を多数引きつれて、逗留されておるのよ、での、

昼間に壇ノ浦の合戦跡を見られての……」

この人物……人ではない……魔性のもの

「……おぬしが合戦物の語り上手とお聞きになっての、ぜひにとの御所望なのじゃが……今から、その琵琶を持って、わしといっしょに、その御高貴な方々の逗留されておる館まで行って、語ってはもらえんかの？」

死人……言葉は正しいけれど生気が……

「はあ……今からでございますか？」

「うむ、ちょっと時刻も遅いが、おぬし、いや、芳一殿、たのむ！」

また侍は頭を下げたようだ、同時にカツという鉄が当たる音がする。

「？……いや！頭をお上げください！参ります！そんな何度も……」

「いや！よかった！では参ろうか！ささ！」

武士の命令であればそむけぬ時代である。芳一もそむくつもりはなかったが、この武士は生きてる人間とは思えなかった。が、武士にしては礼儀正しく、心根の優しさが芳一に伝わった。主君の命令で来ているのであれば、無理矢理に引き摺っていてもよさそうなものをこの武士は、頭を下げた願うのである。

生きている人であれ、死んでいる人であれ、目が見えない私には同じこと……

ただ、声を聞き、その人の心根に応えるだけ、どこへなりとも……

芳一はそう考えていた。生きている人間が素晴らしいわけではなく、生きている人間こそが悪事を働き、殺し合い、罵り合い、競い合い、欲望をさらけ出して、薄汚く生きているのである。死んだ人間には何もできない。所詮死人は死人。芳一は目からの情報は伝達されない。全ての情報は聴覚と触覚から得る。それは、見た目に騙されることなく、真実を知る術なのかもしれない。

芳一は急かされるままに琵琶だけを持ち、草鞋をはいて、その侍と館に向かった。その侍は手を引いてくれた。気が急いているのが伝わるが、慌てることもなく。時折、大丈夫でございますか？——もそっと遅いほうがよろしいか？——などと優しく芳一を気遣ってくれた。引いてくれているその手は黒がねである。カツカツと甲冑が鳴る。

戦装束……この夜中に

今はこの辺りで戦など聞かぬのに……

なるほど……化けて出たか……

芳一は一一平家の落ち武者に手を引かれている。怨みを残し、悲運に沈んだ平家の落ち武者、死霊に手を引かれている。が、恐れることは何も無い。それこそが芳一の望んだ事であり。琵琶を弾き出してからの願いでもある。芳一は、芳一は微笑んだ。

「ん？どうされた芳一殿、何か？」

「いえ、なんでもございません。あなた様のお名前はなんと申されるのですか？」

「い、いや一拙者名乗るほどの者ではござらんが、そうですの一、では恭祐とでもお呼びください、まあ大した身分でもないのじゃが、ささ、もそっと急いで……あ、すまぬ。目が見えないのでは歩きにくい。いや、ゆっくりでけっこうでござる、芳一殿」

「くくく、恭祐殿はお優しいですね。」

「え、いや、拙者は別に、いや、うはっははは！」

芳一は久しぶりに笑ったような気がした。気持ちのいい人物、まさしく死んでいようが生きていようが、そんなものは何ほどのものか。人間として自然と笑みがこぼれることに悪いことがあるうはずもない。生きとし生けるものの中で笑うのは人だけ。それは人間にだけ許された感情。

一一笑いのない生など生ではなく、生あれど笑えぬは死と同じ。

一一己が死ぬことをさっているのも人間だけ、死ぬるまで笑えばよい。

侍が足を止めた。どうやら目的地に着いたようである。何処なのか、芳一にはまったくわからない。さほど寺からは離れていない。しかし、もう芳一にはそんなことはどうでもよかった。何処であろうと、芳一はよかった。

「たれそ！芳一めを召し連れてまいりましたぞ！」

侍は大声を出した。さきほどとは違う物言いであったがそこは侍。主君の館とあれば芳一に殿付けでお越しいただいたと言えるわけではなく。芳一はそこのところがおかしく、またこっそりと微笑んでいた。侍にも気づかれぬように微笑んでいた。

ほどなく、奥から人が出てくる足音が聞こえた。芳一の目の前でその音が止まると同時にさきほどの侍恭祐が芳一の耳元で小声で言った。

「拙者はここまで、また後ほど……」

声をかける暇もなく、侍の足音が遠ざかっていく、カツカツという音とともに。

「ようこそおいでくださいました。ささ、こちらへ」

女性の柔らかい手が芳一の手添えられた。ごつい侍の手から柔らかい女性の手へ、手引きは変わったが、伝わる内面の優しさは変わらない。芳一はますます己の境遇がうれしくなっていた

。同情を受けることは幼い頃からあったことである。同時に、疎まれることのほうが多かった。現実というのは冷酷なもので、目が見えぬのをいいことに苛める者、小馬鹿にする者、騙す者、そういう人間はいる。同情でもなく、陥れる為でもない優しさに触れた、人間として扱われる優しさに触れた、芳一はそんな気がした。

和尚様と同じような心根の人が他にもいるのだな……

ただ……この人たちは死人……皮肉なものだ……

長い、長い廊下を通り、大広間とおぼしき部屋の真ん中あたりに通された。がやがや、ざわざわと人々が小さくざわめいている。どれだけの人がいるのか芳一には見えないが、敵意のようなものは感じられない。視線も多数感じるが、道端でつまずいて転んだ時のような視線ではなく、期待に満ち溢れた視線を感じる。芳一は恥じ入ることなく、出された円座に端座した。もちろん、琵琶を弾きにきたので、まずは琵琶を取り出し調子をしらべた。しらべ終わると静かに、己の目の前に琵琶を置き、芳一はできるだけ、今まで出したことがないほどの大きな声で言った。

「本日はお招きいただきうれしく思います。わたしは目が見えぬただの琵琶弾きにございます。このような場所で弾かせていただくこと、夢のようでございます。精一杯弾かせていただきますので、ご主君様そして皆様方、お楽しみください。」

一同静まり返った。なぜか芳一は涙がこぼれそうになった。その芳一の気持ちは芳一にしかわからぬもの。そして、一拍の後、老女とおぼしき声が聞こえた。

「そのほう、平家を語り聞かせるそうだが、ご主君は中でも壇ノ浦の段を御所望じゃ。あの段は平家のうちでもいちだと哀しき場面……ぜひ聞かせられよ。」

無言で一礼した後、芳一は目の前の琵琶を手に取り、語りだす。荒れる波の音、矢が飛び交う音、男達の雄たけび、船上の激しい足音、刃が鳴る、泣き叫ぶ、断末魔のうめき、琵琶で全て表現する芳一。いつもとは違い感情までこめられたその演奏は聞く者全てをその幻覚に引き込んだ、まるでその場にいるように、いや、その場にいた者たちに向けて芳一は弾く。怨みを残し、死んでいった者たちを前にして、その戦場、地獄を再現して見せているのである。しんと静まり返った一同は何を思っているのか、悲しんでいるのか、齒軋りして悔しんでいるのか、その心は芳一には見えない、見えないが芳一は精一杯、平家を語る、これまでで最高の、平家物語を語っている。

そして、曲は終盤にさしかかる。女子供にいたるまでの入水自殺。幼帝を抱いて入水自殺する二位の局、人が人を追い込み、殺す、殺し合い、殺人、哀れな結末、逃げ道のない船上で泣き叫ぶ幼い子供たち、人間とは愚かな生き物、私利私欲の為に、人々は永遠に殺し合う、名誉など何ほどのもの、栄華など何ほどのもの！生きて！生きて笑って暮らしてこそ人、幼き子供たちを不

幸に陥れて何が勝利か！人間とは愚かなり……

曲は終わった。一同のすすり泣き、はたまた、激しい嗚咽の中、芳一も同じように涙を流していた。とめどなく流れる涙。頬を伝う涙をぬぐうでもなく、芳一は、静かに琵琶を置き、一礼した。

「琵琶の名手芳一、わが主君も御満悦。礼物を下げ渡す。そこで、これより六日間、琵琶を聞かせに参っていただく。わが主君はその後に御上洛あそばす。明日の夜も必ずまかりでるよう……」

「かしこまりました」

「そして、申し付けることがある。この事、一切他言せぬように、よいな芳一」

「かしこまりました……」

芳一は事の次第を全て把握している。他言するわけもない。帰りは迎えに来た侍恭祐が送りどけてくれた。恭祐と芳一は帰りの道で少し会話を交わしたが、たわいのない、友達が語るような雑談であった。恭祐は寺の裏手の縁先で言った。

「ではまた明日、同時刻に参るので。芳一殿、失礼つかまつる」

「恭祐殿、わたしに殿はおやめください。芳一でけっこうです」

「さ、さようか……では、二人だけの時は芳一殿も拙者のことは恭祐とお呼びくださいませ」

「かしこまりました、では明日……」

「短い間ではあるが、よろしく、芳一、では、失礼……」

「こちらこそ、恭祐……」

侍は笑ったようだ。芳一もしぜん笑顔になっていた。蛙はまだ鳴いている。

そして二日目の夜も芳一は寺を抜け出し、同じように琵琶を弾き戻ってきたのだが、寺を留守にしていたことが和尚に露見していた。芳一は和尚の前に呼びつけられ、事の次第を尋ねられた。

「芳一、そなたは目が見えぬのに、夜更けに一人で何処に行っていたのじゃな。一言断わってくれたならば寺男の一人でも付けて出してやったのに。そなたのこと寺の皆が心配しておったのじゃぞ……叱責しているわけではない、それはわかるであろう？」

おしょうさま……

「和尚様、どうかご勘弁ください。夜更けの外出については一切語れませぬ。私用と申しますか……男として、一切語れませぬ。ご心配かけたことはお詫びいたします」

「……そうか。男としてと申すのか。ならばよい。ただ、そなたの身に何かよくないことが起きているのでなければよい。わしも仏道に帰依した身なれど、男よ。何も聞かぬ。困ったことがあれば相談ぐらいには乗れるのでな」



「ありがとうございます和尚様、ありがとうございます……」

――芳一は何か魅入られておるのかもしれぬ  
――しかし、芳一はいつになく晴れ晴れとした顔をしている  
――男として……か

「ゆっくり休みなさい。疲れたであろう芳一」

「はい、それでは失礼いたします」

――何もなければよいがな

空が白んできていた。夏の夜明けは殊更に早いものである。

三日目の夜、雨降り。ひどく暗い夜。芳一は約束通り、恭祐と連れ立って出かけて行った。そして、全ての真相が露見した。寺男たちが和尚の遣いで檀家の家に行った帰りに、阿弥陀寺の墓所でさかんに琵琶を弾く音を聞いた。墓所は雨降りということも重なって一面の闇。ざーざーという雨の音に混じって激しい琵琶の音が聞こえる。少し近づくと漆黒の闇の中に鬼火がぼつぼつと二三燃えている、青白い朧げな光が燃えている。寺男たちはちょうちんの明かりをたよりに琵琶の音の元、芳一を静かに探した。そして――

芳一は見つけられた。降りしきる雨の中、安徳天皇の陵の前に端座して、激しく琵琶を掻き鳴らしている。ありったけの声をはりあげて壇ノ浦の段を語っている。芳一のまわりには無数の鬼火がひしめきあっている。それは闇が明るくなるほどの鬼火の数、一際明るく、安徳天皇の陵の前で大きな鬼火がゆらゆらと揺れている。その大きな炎は小さな弱々しい炎を抱いている。寺男たちは慌てふためいて大声で芳一の名を呼んだが、芳一の耳には届かない。琵琶を一心に掻き鳴らす。涙なのか雨に濡れているのかわからぬが、頬が濡れている。このままではいけないと寺男たちは近づき、もう一度耳もとで怒鳴った。

「芳一さん！さあ！おれたちと帰ろう！はやく！」

すると芳一は

「君の御前においてさような邪魔だて！容赦せんぞ！」

寺男たちはたじろいだ。ふだんの芳一は大人しく、声を荒らげることなどない。その芳一が怒っている。怒っているというよりも悲しんでいる。しかし、捨て置くわけにもいかない。ただ事でないのはわかる。寺男たちは無理矢理に芳一を連れ帰った。離せと暴れる芳一を無理矢理に連れて帰った。そして、芳一は和尚の前に連れていかれた。

「芳一や。何も聞くなというから何も聞かぬが、おまえは魔に魅入られておる。墓所で夜中に琵琶

琵琶を掻き鳴らすなどとは尋常なおこないではない。わかっておるな？」

わかって……

「わかっております。しかし、私は弾かねばならないのです。行かねばならないのです」

「……そうか、わしもいくら物分りがいいとはいえ、わしはわしなりにおまえを守る、おまえが断わろうと、わしはおまえを守らせてもらう。それは、歳が離れているとはいえ、男が男に惚れたればこそ。おまえの境遇の哀れなのはわかるが、それにすねて生きることを疎かにしておるのが気がかりじゃった。今のおまえは確かに生き生きとしておる。じゃがな、魔に魅入られると連れて行かれるのじゃ。それは断じて止めねばならん！だからこちら勝手に阻止させてもらう、よいな、否、よいなとは聞かぬ」

最初から……

「最初からわかっておりました。連れて行かれるならばそれもよしと……」

「たわけたことを抜かすな！」

和尚は突然大声を出した。怒らず、騒がず、多くを語らない和尚が叫んだ。

「連れて行かれるならそれもよしだと！いい加減にしないか！おまえのことを心配してくれる人がいる間は絶対にゆるさん！死ぬの生きるのが己の勝手だとでも思っておるのか！このたわけが！生きてくても生きれぬ人がおるのに！そんなに此の世はつまらんか！おまえに何がわかるのか！わしが生きている間はゆるさんぞ！目が見えぬと、もちろん不自由もあろう、しかし、目が見えぬおぬしにしか見えぬこともあろう！しっかりと見据えて、歩いてゆくのは！わかったな芳一！」

……ありがとうございます和尚様。わたしのような者にそこまで……

「わかりました、お守りくださいませ……」

「わしは今宵もまた一軒通夜があるので、留守にしなければいけない。そのかわり、おまえの身体の隅々に護符の経文を書きつけておく。しっかりするのじゃぞ芳一」

夜になって和尚は出かけた。芳一の身体には隙間もなく般若心経がしたためられている。和尚は出かける前に芳一に言った。

——何があっても無言で堪えよ。いくら経文がそなたを隠しておっても、声を出せば姿は丸見えになる。経文の効果は消える。連れて行かれること必定。そうなれば、そなたの望み通りかもしれぬが、わしはゆるさん。生あるのに死に急ぐこと断じてゆるさん、わかったな、芳一——

いつもの縁先に端座して芳一は考えていた。生とは何か？死とは何か？彼の世此の世というのが、ほんとうのところはどうなのか？答えなど出ない問いを繰り返していた。やがて、いつもの時刻となり足音が芳一の前で止まった。

「芳一！」

芳一は息をころしてじっと座っている。膝に置いた握りこぶしが震える。

……すまぬ。恭祐、すまぬ……

「芳一！」

恭祐は辺りを見回す。芳一は、恭祐との会話を回想する。武士として手柄を立てることができずに門番に回されたいきさつ。恭祐の家族の話。そして、友と呼べる友が居なかったこと。戦で人を殺すのが厭だということ。春が好きだということ。最初に迎えにきたときのこと……

「ほう……」

三度目を呼びかけて恭祐は呼ぶのをやめた。琵琶の横に耳が見えた。芳一の耳。それこそは芳一が己の姿を隠している証拠。恭祐は思った。この耳を持ち帰れば、自分はちゃんと勤めを果たしたことを分かってもらえる。芳一は連れて行けぬが証拠として、琵琶と耳を持ち帰ればいい。戦場でも大将は首を持って帰るが雑兵などは耳を切り取って一括りに何人と勘定する……人を人とも思わぬ狂気。恭祐にはできない。恭祐は芳一のことを友と思っている。短い間ではあるが二人には伝わるものがあつた。目が見えぬゆえの不幸の数々、それも恭祐には腹立たしかつた。目が見えぬから、優しすぎるから、二人は世を拗ねていた。互いに笑つて名前を呼び合つた友、恭祐には始めてであつた。

……拙者が罰をうければいいか、無理もない。死霊の相手など、さらば芳一、友よ……

足音が遠のいていく、一步一步、芳一の前から遠ざかる。もう裏木戸のあたりまで、

「恭祐！わたしはここにいる！」

刹那、芳一は大声を出した。

……和尚様おゆるしくください。わたしは友を裏切ることはできません！

「ほ、芳一……お、おつたのか、いや、なに」

「何処を見てる恭祐、ここにおる、ささ参ろうか！」

「お、おお、拙者寝ぼけておるのかな、参ろうか！」

二人は連れ立って館に向かつた。館などない、見えない。しかし、芳一は元々目が見えない。目が見えないから見えるものがある、和尚はそう言つた。それこそは、人の心根が見える。目が見えていても何も見ていない者もいる。見なければいけないものからも目を逸らす者もいる。芳一は見ることをやめなかつた。友の心は綺麗に見えていることだろう。恭祐の優しさは芳一に形となつて見えていたのかもしれない。

「おお、芳一、今夜はでっかい満月が出て綺麗じゃ、あ、芳一は目が見えぬのであつたなこれはすまんすまん、満天の星空に綺麗な満月が出ておるぞ」

「ふふふ、見えますよ恭祐。あなたの言葉で見えます。ありがとう」

澄んだ夜空に月が出ていた。芳一と恭祐は足を止めた。

「連れてまいったぞ！」

恭祐がいつものように呼ぶといつものように足音が聞こえた。女性の手が芳一に手重なった。そのとき、芳一が言った。

「本日は、恭祐殿も同席させていただきたい、させていただけなければ、わたしはこの琵琶をこの場で叩き折り、帰らせていただく！」

「な！芳一何を言うのじゃ！そんな……」

その時奥から太い男の声がした。

「おう！恭祐もいっしょにまいれ！かまわぬぞ！」

「おゆるしが出たぞ恭祐、ささ、連れて行ってくれ、どこへなりとも！」

「お、おう、芳一、では参るぞ！」

二人は女を無視してどかどかと上がって行った。胸を張り。肩で風きり、男二人が笑顔で長い廊下を歩く。幻覚であれ、なんであれ、気持ちのいいのに変わりはない。奥の間の引き戸を勢いよく左右に開けて二人はずいと奥まで進んで、端座した。

「大殿様、お久しゅうございます、恭祐です」

「おお、なんだか良い顔になっておるの、そうか、友ができたか、のう芳一」

「はい、良い方にお迎えに来ていただきありがとうございます」

「うむ」

「わたしの話を少し聞いていただきたいのですがよろしいでしょうか？」

「……なるほど。今宵最後となるか芳一、経文が書いてあるの、では聞こう」

「はい、わたしは皆様方が今は亡き幼帝と平家の方々と最初から存じておりました。御霊というかたちであれ、本人様方に聞いていただけるのであればと思い一生懸命語らせていただきましたが、和尚に露見いたしました。和尚はわたしのような目の見えない者を大事にしてくれています。わたしは、皆様と御一緒に彼の世へ行く覚悟でございましたが、そうもできないのです。和尚のことが気がかりで。しかし、わたしは恭祐という友を裏切ることもできませんでした、どちらを選ぶなどということはできませんでした。どちらもわたしにとっては大事な友。そして、此の世に怨みのあるのも仕方なしと思いますが、どうかわたしのつまらぬ首に免じていただきたいのです。後の処分はおまかせいたします。芳一逃げも隠れもいたしません」

「芳一や、何か勘違いしておるな。」

「は？」

「わしはおまえを彼の世になど連れてはいかん。それに此の世に未練など何もない。わしはな、此の世に生ある時に栄華を極めた。欲しい物は全て手に入れ、気に入らぬ者は全て消す。敵対するものは滅する。そして、何を得たかということ、終わりのない戦いの日々であった。近親者にまで疑いの目を向け、常に周りの敵を警戒し、戦って勝っては怨まれ、人をたくさん殺してきた。わしの身内もたくさん死に追いやった。最初はただ降りかかる火の粉を振り払う為であったのが、いつの間にか己の私利私欲の為に人を殺していた。果て無き人間同士の殺し合い。わしはその

虚しさを知った、死して知った。蓄えた金銀財宝は彼の世に持っていけぬが、わしが殺した者の恨みや悲しみは永遠にこの身に残るのじゃ。供養などなんの意味も成さぬ。謝罪など誰に聞かせるのか。わしは、逃れられぬ罪を背負っておる。人々が笑顔で暮らせる世こそが幸せである、愛する者と平和に暮らせる世こそが幸せである、と死して気がついた。遅い、遅すぎる、わしも愛する人を死に追いやり、可愛い子供達にまで恐怖を味合わせた、後悔してもしきれぬ。そこで、芳一おぬしにの、わが平家の愚かな物語を語りつづけていってもらいたいのじゃ。人間同士が殺し合うことの愚かさを語りつづけてほしいのじゃ……殺し合いからは何も生まれぬ、愛し合っこそ、信頼しあっこそ、生まれるものがある。盛者必衰どころか生者必滅、生あるものは全ていつかは死ぬ、死ぬまで皆で笑えればよい。」

芳一は涙が出た。恭祐も泣いているのだろう。涙をすする音が聞こえる。

「承知いたしました。この芳一、一生歌っていきます」

「たのんだぞ、芳一。もう今宵は物語はよい。最後に恭祐よ」

「は、はい、大殿！」

「生ある時に、お前の優しさが俺にもあればよかった。お前から学ぶべきことは多い、おまえは、本当にいいやつだ。さあ行くぞ、これで最後じゃ、友に挨拶せよ」

「芳一、ありがとう、俺は、俺はだめな武将であったが、悔いはない、おまえと友になれたこと、そして、大殿にも、もったいない言葉をもらった、ありがとう友よ！芳一よ！」

「恭祐！恭祐！行くな！わたしも、やっぱりわたしも！連れて行ってください！」

「芳一……夜が明けてまいったぞ。たのんだぞ芳一！いずれまた会おう。その時は一緒に酒でも飲もうではないか！ではさらばじゃ！芳一！」

「ああ！待ってください！恭祐！恭祐！……」

墓所に東から朝日がさす。芳一は一人立ち尽くす。

でも、今までのように一人ではない。

終